

『何度でもおしえて』

著：坂井朱生

ill：北沢きょう

(駄目——っ)

流されるな、と拓実は自分に言いきかせ、唇を噛みしめる。無意識のうちに縋るものを求めて彼の背に伸ばしかけた手を、堅く握りしめる。

狗飼の唇が顎のラインを辿り、耳朶を噛んだ。

——と。

救いの手は、唐突にとどいた。

「で、電話っ！」

場違いなほど軽やかなベルの音が響き、濃度を増しかけていた空気を一気に散らす。

「放っておけばいいだろう。留守電はセット済みだよ」

「ほら、でないっ。夜中の電話は緊急の場合が多いんだからね」

狗飼の身体を突きとばし、大きく息をついた。苦笑しながら狗飼が電話に向かうのを横目に、拓実は全速力で洋服を着る。

「ああ、……おまえか」

受話器をとった狗飼の表情が一転する。ずっと見せていたどこか意地悪げな様子などどこにもない、見ているほうが気恥ずかしくなるほど優しい顔だった。

——身体抜きなら誰よりも大切な相手がいる。

狗飼の声が耳によみがえった。

もしかしたら、その人かもしれない。

瞳を優しげに和ませて微笑みながら話をしている狗飼の姿に、彼がどれほど相手を大切に思っているのかを見せつけられたような気がする。

心臓が、鋭く痛んだ。

やっぱり、寝たりするんじゃなかった。彼に近づくんじゃなかった。

一時の気の迷いのせいで、こんなにつらくなるのだ。

(……嫌だ……っ)

電話の相手が、狗飼にあんな表情をさせる誰かが羨(うらや)ましくて妬(ねた)ましくて、拓実は顔を背けると部屋をとびだした。

ばたばたと走り去って、人気のない商店街の途中でとまった。

莫迦みたいだ。

一人で盛りあがったり狼狽えたり。いったい、なにをしているんだろう。

とびだした自分を追ってこない狗飼に安堵したのか落胆したのか判断もつかないまま、拓実はなにもかも考えるのを放棄した。

とにかく、疲れていたから。

「駅、どっちだろ」

まだ時刻は真夜中で、電車も走っていない。けれど駅まで行かないことには、いったいここが何(ど)処(こ)なのかすらわからない。車で連れてこられるあいだ、ろくに道筋

など見てもいなかった。

頭を冷やすために、歩いて帰るのもいいかもしれない。

「いけねっ」

カツンと乾いた音がした。指輪が抜けて道路に転がりおちたのを慌てて探す。

あたりは暗い。街灯があるにしろ、小さいものを探すのは大変だった。這い蹲(つくば)るようにして路上を懸命に探しまわり、ようやく数歩ほど離れた車道と歩道の境目に落ちていたのを見つける。

ほっとして指に埋めなおすと、なんだかひどく疲れていた。

今日一日、気分の浮き沈みが激しすぎて、身体以上に心が疲れはてていた。

「……帰ろ」

ぽつんぽつんと街灯の乏しい光だけが照らす暗い道を、拓実はため息をついて歩きはじめた。

本文 p78～80 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>